

## 米国研修を通して生まれたホースマン同士の繋がり

有限会社坂東牧場 荒木 一仁

はじめに、今回の米国競馬事情視察研修に行かせていただいた坂東社長に感謝するとともに、こころよく送り出してくれました坂東牧場スタッフの皆さんに感謝いたします。

今回の研修は10日間の日程で行われ、初めの2日間はサンタアニタ競馬場にてブリーダーズカップを見学しました。

まずは競馬場の雰囲気ですが、日本とは違って建物もお城的なデザインで、私たちがイメージする競馬場とは異なりました。競馬場自体はトラックコースも含めて全体的に小さく感じられ、これだけ大きな国土をもつアメリカですが、競馬場は日本のほうが断然規模が大きいようです。

しかしこの2日間のレースに世界の名だたる名馬が集い、日本ダービーもしくはジャパンカップ以上の熱気と雰囲気を感じましたし、それ以上にファンを含めたすべての人が、勝ち負けを度外視して盛り上がる姿は新鮮なものがありました。また、日本では関係者とファンのあいだにはいつも壁がありますが、アメリカではジョッキーを含めてファンと関係者が触れ合える場面が多く、実際に私も日本でお馴染みのK・デザーモ騎手やK・ファロン騎手などから簡単にサインをもらえました。

専門的なことでは、出走馬の状態を装鞍所から観ることができ、パドックに出ている時間も日本に比べてかなり短く感じます。本馬場入場したあとも見慣れない光景が続き、出走馬の横にリードホースと呼ばれる馬が寄り添って、リードホースの騎乗者は引き手のようなもので出走馬を抑えています。想像ですが、このリードホースは出走馬の落ち着きを促していて、一見危険には見えるものの逆に危険を防止しているのだと思います。このような日本ではありえない光景を見たこと、そして史上初めてブリーダーズカップクラシックを牝馬が勝つという偉業をその場で観ることができたのは鳥肌ものでした。

その優勝馬ゼニヤッタ号は500kgを超える大型馬で、これまで後方からの競馬で13戦13勝と不敗。今回も自分の競馬に徹して世界の一流牡馬たちを撃破した瞬間には、競馬場全体がとてつもない歓声と喚起の雄叫びに包まれ、知らない人々がハイタッチと抱擁をするなかに自分たちも巻き込まれて感動の一言でした。

翌日からは1日の移動日をはさみ、アメリカ、もしくは世界に名だたる牧場と種牡馬の見学となり、全部で11牧場65頭の種牡馬を見学しました。

まず、日本とは牧場の規模が違って驚かされました。端が見えないほど広い放牧地に4、5頭の馬しか放していない雄大さ、厩舎とは思えないデザインと豪華さなど、いろいろありました。そのなかで自分たちが日本に持ち帰り、実践できることを考えたところ、一番思ったのは馬との信頼関係でした。日本で種牡馬と聞くと、気性が荒くてうるさいと思う

人が多いと思いますし、実際そういう面はあると感じます。それは、種牡馬だけでなく繁殖牝馬、育成馬のすべてに共通することだと思いますが、アメリカで見た種牡馬は大人しく、引き手の指示に従うようにしっかり教育されています。

これは実際に見てきた人ではないとわからないと思いますが、凄いと感じる一番のポイントでした。そのほかでは、牧場に対する手のかけ方です。お金がかかっているのはもちろんですが、厩舎でホコリやススが付いている箇所はほとんどなく、廊下にも汚れがありません。これは人の努力と効率を上げることで実行できると思いますし、お金もかかるとは思います。アメリカの牧場では竹ぼうきではなくエアブローと呼ばれる送風機がよく使われています。馬道に関しても、インターロッキングブロックと呼ばれるゴム製のブロックを組み合わせたものを使っており、見栄えもよく、アスファルトやコンクリートに比べて馬が滑る事故も防げると感じましたが、北海道で使用するには凍結などがあるのでそこを考慮しないと難しいかもしれません。

そんなことを考えながらすべての日程が終了したあと一番感じたのは、人と人との繋がりがりだと思いました。

この研修には、錦岡牧場土井社長を含め20人の方が参加しましたが、その方々とアメリカと日本の違いや、自分の牧場はこうしているなどと話したことが自分のなかでかなりの財産になったと確信しています。

この研修の良さは、馬に関わる仕事をしている人が、種牡馬、繁殖、育成（騎乗者）、マネジメント、事務局などさまざまな役割のスタッフが集まることにより、競馬というものに対していろんな角度から討論できることだと思います。もし可能であれば来年も再来年もこの研修を続けていただき、多くの人に世界の競馬を感じてもらい、多くの人にたくさんの新たな仲間を作っていただき、少しでも競馬の発展に力添え出来る人材が育っていくことを願います。

今回この研修を行っていただいた日本競走馬協会様と、同行していただいた皆様、そして坂東社長にお礼を申し上げて研修レポートを終わらせていただきます。

皆さん本当にありがとうございました！